

1

1 原点
2 子どもは未
3 一所

4 面白い
5 Ⅲ

6 その子がそ
b 人生
(6 完答)

7 A ウ B イ C エ
8 羽
9 ウ
10 エ
(7 完答)

11 a 改めて
b 役
c 連
なつて

d 争い

2

1 a 都合
b 悲鳴
c 深い

2 ウ
3 I 至福の時間
II 斜め

4 ア
5 (記述題)
6 ア
7 布で

8 a 花火の絵
b 心をひかれる
(8 完答)

9 杏里の笑顔
10 エ
11 その音

2

5 画家になりたいという一真の姿が、家族も家庭もすてるほど絵にとりつかれた自分の父親の姿と重なるから。

(同意可)

配点	
1	11
2	1
各2点×	7=14点
2	5
その他	各4点×20=80点
100点	

1 本文全体から、子どもにとって必要なことは様々な経験をさせ、その中で興味を持てるものを見つけていることであるとわかる。(中略)の二行前の「そうしたく手伝うこと」や、本文の最後の段落の「その子のく探しているようなもの」が、「あらゆる教育の原点」だと言いつ切っていることに注目しよう。

2 線②の直後に「それを温かく優しく応援するたくさんの大人と社会が必要です」と書かれているので、子どもには何かが不足しているためだ、と考えることができる。それについて具体的に書かれているひと続きの三文を探す。

3 ここでの「応援」とは「声援をおくる」という応援ではなく、「手を差し伸べる」という応援であることはわかるだろう。——線③の直前の「それ」とは「子どもが生命を輝かせること」である。(中略)の二行前に「そうした子どもの生命をどう輝かせるか」とあり、この一文を見ると「周囲が手伝うこと」とある。この「周囲」が「大人と社会」をさしているのが、答えとしてふさわしいとわかる。

4 「生きる」④「と感じられれば生命を輝かせることができると言っているのである。」④の四行後の「生きる」とはとても面白いことと思いたい、(中略)の十行後の「やっぱり生きるって面白い」という表現に注目しよう。

5 I・II・IVは、「ぬ・ず・ません」のどれかに置きかえることができるので、打ち消しの助動詞の「ない」である。IIIは、そのように置きかえることができず、「ある」に置きかえることのできる形容詞の「ない」である。

6 本文中に複数ある「生命の物語」のうち、初めに出てくる十六行目に「そうして自分でしかつくれない『私の生命の物語』が…」とあるので、この直前に注目すればいいとわかる。「その子がく道」とあるが、「道」は比喩表現なので、言いかえる必要がある。

7 (A)の後の「生きる条件はみな違」うというのは当たり前のことなので、「言うまでもなく」という意味の「もちろん」が入る。(B)の前には、条件・幸せの本身はみな違うとあり、後には、幸せを実感できる体験はみなつくれるとあるので、(B)には逆接の仲間の「ただ」が入る。「くすぶっている」「火がつく」という順番で物事が起こっているのが、(C)には前のことがらに続いて後のことがらが起きるという意味の「すると」が入る。

8 問題にある通り、「羽を伸ば」すは「のびのびと自由にふるまう」という意味である。普段から知らない言葉に出会ったら意味調べを積極的にしていこう。

9 線⑦の直後の文から、くすぶっているうちは消極的な態度をとることがわかるので、「ぱつと燃え広がる」ということは、「積極的な様子に変わる」ということになる。また、その変化に至るまでに、大人は諦めずに様々な世界を見せ続けていく必要があることもおさえない。

10 様々な条件・環境の違いなどによって、子どもが興味を示すものは違ってくるが、大人はどんな子どもに対しても「生きる」ということは面白い」と思えるような体験をさせていくことが、教育の原点なのである。

11 a「改」は、三画目を「己」のようにはねてはいけないとされることが多い。b「役」は、五画目をきちんと外側にはねるようにしよう。c「連」は、しんにょうの部分きちんと三画で書こう。d「争」は、初めの二画の形と、四画目をつらぬくように書くことに気をつけよう。

2 a「都会」の「都」は、左下を「目」と書いてはいけない。b「悲鳴」の「悲」を「非」としないようにしよう。c「深」を「探」としないように気をつけよう。

2 何かの「答え」と同時に、「展覧会で落選したわけ」もわかったとある。この段落のここより後に書かれている「落選したわけ」が途中で「杏里の魅力」に変わっている。「ひそやかに、でも、楽しみに笑っている」笑顔が杏里の魅力だと気づいたのである。

3 I 基本的なことだが、「それ」が指示語なので、まずはここより前を見るべきであるということをおさえてほしい。ここでの「至福の時間」とは「杏里の笑顔を描く時間」である。これからも続くと思っていたそんな絵を描く時間が、父親によって「こんなごに碎」かれ「引き千切られた」のである。

4 II 「至福の時間」が「引き千切られた」とは、杏里を描くことができなくなる、ということである。「描くことができなくなる」ということを象徴しているものを探すのだから、「描く」と関係があるのではないかと見当をつけてほしい。「キャンバス」とは「画布(絵を描く布)」のことである。それを知らなくても、ナイフをキャンバスに突き立てられたり、キャンバスを倒されたりした一真が「おれの絵が！」と叫んだり、「白布で梱包されたキャンバス」の白布を取り去ると「花火の絵」が現れたりするところから、「絵を描くもの」だとわかっただろう。その「キャンバス」がどうなってしまうと絵は描けなくなるだろうか。

4 線③は、今このときではなく、今朝、父に言われた言葉である。——線③の二行後から「今朝」あったことの回想である。絵を描くことを遊びだと思っている父親は、一真が画家として一生描き続けるということが気に入らないのである。

5 父は一真が画家になることを許さない、ということしか二つ目の(中略)より前からはわからなかった。ということとは二つ目の(中略)より後に何か手がかかりがあるはずだと考え、この先をねばり強く読んでほしい。二つ目の(中略)の直後や本文後半から「父親が祖父の絵を仕方なく屋根裏にしまい込んだ」こと、さらに「祖父も絵を描いていた」ことがわかる。二つ目の(中略)から十三行目の「親父の絵なんて、見るのも嫌だ」という一成のつぶやきからも、絵を描くことを許せないのは祖父が関係しているからだと気づいてほしい。では祖父はどんな人だと書かれていたか。本文終わりから二行目に「家族も家庭もするほど絵にとりつかれた祖父」とある。父親が絵を憎む理由としては十分ではないだろうか。

6 自分の描いていた絵にナイフを突き立てられ、その理由すらわからないままに強烈に絵を描くことを反対されている一真の気持ちを読みとってほしい。アについて、本文に二つある(中略)の間からは、一真の「後悔」は読みとれないだろう。

7 「親父の絵なんて、見るのも嫌だ」という一成のつぶやきが聞こえる気がしたのは、しまい込まれている祖父の絵を見てそんな気がしたからである。父親が自発的に祖父の絵をしまっていたならば、しまわれている祖父の絵を見てもそんなことは思わないだろう。

8 直前の祥子のせりふに注目できただろうか。「しまい込まれていた祖父の絵を一真が見つけ、それに心をひかれること」を「運命」だと言っているのである。「祖父の絵」という言葉は本文中にないので四字で同意表現を探す必要がある。ちなみに、「親父の絵」だと◎の文にあてはめたときに明らかに不自然な文脈になる。仮にそう書いてしまったとしても、見直しの際に気づかなければならない。

9 祖父が花火の一瞬のきらめきをキャンバスに永遠に留めたように、一真は杏里の笑顔を永遠にキャンバスに留めておこうとしたのである。——線⑨より前の、一真が祖父の絵を見ている場面には、「息を飲みこんでいた」「迫力があつた」「こちらにぐいぐいと迫って来る」という表現があつた。一真が祖父の絵の持つ力に圧倒されていることは読み取れただろうか。

11 ◎の文の「心臓」も「鼓動」も本文中には出てこないが、「心臓の鼓動」をあらわす言葉は本文終わりから十二行目に書かれていた。「息を飲みこんでい」る音が「どくん」ではおかしいことに通読時に気がついていれば容易に正答にたどり着けただろう。以上